

# みづち随想

脚本

丹治 富美子

## 歌物語 みづち

みづちは歌物語りである。歌物語とは古典の中の伊勢物語、大和物語等を示すが、私の中では定義に満たないまでも源氏物語も又視野にある。

歌物語の歌とは、和歌(三十一文字)のことであり、「昔男ありけり」と始まる伊勢物語は、和歌を中心にストーリーが進められていく短い物語のことで、その物語を集めたものことである。

自作の短歌や詩が次々と作曲されていく時に、その中には連作のものもあつたので、歌物語の原型はおのずと出来上がっていた。

古典の中に居る者として読む歌物語と、音楽としての歌物語が必然であるかのように、接点を持ったのである。

再演を重ねながら「髪」の章「露の章」を完成させた。

—音と文学の融合の世界—

シンプルな極限の舞台、照明の力をたよりにする不思議な異次元の世界を作り出すことが出来た。

歌物語がまさしく音をもった歌物語となつたのである。「髪」の章、「露の章」はあくまでも異次元の世界であるとして。

多くのオペラが会話でストーリーが進行していくが「みづち」においても、歌物語の手法をとり入れればアリアを美しく浮かび上がらせることが出来るのではないかの思いに至つたのである。

古語には美しい言葉が沢山あり、又時代をも考慮して、アリアでは古語を散りばめるように使った。音楽は瞬間芸術であり即座に理解されることが要求され、幾度も読み返して味わいを知って戴くことは不可能であるため、ぎりぎりの限りでの古語の表現に止めた。

例を上げれば

夕星の歌の夕星はこの時代(約千

年前)では夕づつであるが夕星とした。夕づつとは暮れなずむ頃、西方の空に輝く金星のことであり、小太郎と夕月姫は幼い頃から同じ星をみていたことになるのである。

語り尽くせないが作品としての表現と音を伴う言葉との狭間で試行錯誤した。

又このオペラのタイトル「みづち」であるが、「みづち」とは、四つの足を持ち、頭には角があるというへびに似た想像上の動物である。本来は、毒を吐いて人間に害を及ぼすとされているがこのオペラでは神と位置づけられた。古くは「みづち」と清音で呼ばれていたと思われる。

宇宙・自然・愛という三つのテーマを持ち、宇宙(星)・自然(ふるさと)・愛(髪)という表現で、大きく旅という伏線を持ちながら展開させた。

神である「みづち」、神と人間の間位置にある黒姫、そして小太郎を

はじめとする人間達、小太郎は険しい山に登ることで神に近づき、人として生れた意義を知るのである。又、天河・北斗・玄武、天河北斗は共に星の名前であり、玄武は北方をつかさどる水の神でもあり黒姫の供人としてのネーミングにふさわしいと秘そかに自己満足している。

オペラは幾度も見ることで、色々な発見があり新たな感動を覚えるものであるが、「みづち」も、再演、再演を願って、私の書いた脚本のたくらみを見破って戴けるのではと、そのことも楽しみにしている。

## — 三千年の未来へ —

日本語には雨を表す言葉は多い。春雨、村雨、春霖、衆雨、肘かさ雨、篠突く雨、寒九の雨、外持雨、菜種梅雨は周知の通りであるが、山茶花梅雨などもある。季節を表わし、特定地域の言葉もあつたりする。

人々の生活と深くかわりながら、長い時代を経て日本の風土が生み出した美しく、豊かな言葉であると思う。昔も今も、人々は雨の降る様に一喜一憂する。これからも時代に即した雨の言葉が次々と生れることであらう。

しかし、水の惑星とまで言われる地球に危機が押しよせているという恐怖を感じる。今日、水の大切さが切実のこととなり、世界水フォーラムが、一九九七、モロッコ、二〇〇〇、オランダ、二〇〇三年には京都で開催された。

二〇二五年には世界中のあらゆる国々で水の危機が、確実に訪れるというのである。

ダムを造るといふ文明は素晴らしく一つの解決方法であるが、峰々に降り積った雪が、雪解け水となり、川に注ぎ、あるいは地中深くしみ入り、長い歳月を経て再び地上にあふれ出る節理を知る時、雪も又、自然のダムなのである。すべてを拒絶するということではないが、自然保護は、一世紀いや、それ以上の単位で考えなければならぬことであり、次の世代でなく未来永劫につなげていくことではなからうか。

自然は自分だけのものではなく、

限られた人々のものではないことを小太郎の旅はそのことを知る意味でもあったのである。神である「みづち」は、助けを必要とほしくないが、愚かな人間に身を呈して自然の大切さを示唆しなければならなかったのである。

「エゼンの恐竜」の著者であるカール・セーガン (Carl Sagan) は、一五〇億年という地球誕生からの時間をわかりやすく、一年の長さに縮めたカレンダーを作った。

恐竜は二億五〇〇〇万年地球を汚すことなく節度をわきまえ生き続け、天変地異がなければまだまだ栄え続ける予定だったと言っているのである。カール・セーガンのカレンダーでみると、科学は人類の歴史において、急速に地球を破壊に導いていることを知ることが出来、恐竜の偉大な人間の愚かさを嘆かずにはいられない。又、人間の一生などまばたきするに等しく、それ故に飯の宿りへの地球へのマナーをひとりひとりが大切にしたいものである。

あらゆる生物の上に君臨している人類が地球を支配している驕りをすて、責任の重さを認識し、地球の未来を考えるべきではなからうか。

人間の英知が生み出したことは、

解決することも又、英知にかかっていると説く人がいるが、必ず解決する方法があると信じていたい。

「みづち」が千年もの昔から、二千年の私達に警告を発していたにもかかわらず、気づかずにおいた私達が、今悔恨の思いを込めて、三千年への未来に向け、メッセージを送る役割を果たせたらと思う。

## 森の中で

森の遅い春は、ダンコウバイの香りが知らせてくれる。目立たないその花は、気づかずに行きすぎようとする私をかすかにただよう香りで立ち止まらせる。やがてこぶしが咲くと次々と花のリレーが始まり、花を訪ね忙しい日々となる。

花の好きな私の庭は、植えてくれる人、種を撒いてくれる鳥達でいつの間にか花の木がふえてゆく。心やさしい人や動物にかこまれて、戻ろうとしない私をカルイザワ科ヒメ花と人はよぶ。

かつては一か月に一、二度軽井沢に来ることで心は癒され都会の雑踏の中に居ることができた。私にとつての軽井沢は、いつでもすぐに行けるといふ程よい距離にあり、心やす

らげる場所であった。それはまるで曲の中に幾度となく表われる四分休符のようで「軽井沢は四分休符」などとエッセイを書いた。いつの頃からかその割合は逆転し心のままに居られる森に住むことを選んでしまった。

森は傷ついた心を昇華してくれる。雄弁であることより無言でいることの方がいつかは真実のことを伝えることが出来る。憎しみをもつことより、やさしく思うことの方が心安らかにいられることを気づかせてくれる。

作品は書く者の人格が表われ、それを問われるとするなら心美しくあることを第一としたい。自分の書く詩の一行が心をあたたく満ち、美しい思いをよみがえらせる一滴の雫になれればと思う。

森は又さまざまなことを教えてくれる。森の冬はある日突然に訪れる。まだ色鮮やかな本の葉が一斉に散りはじめ。落葉松はグイヤモンドラストと見まごうばかりの黄金色に輝く針のような葉を空中に降らせる。夜となく昼となくその行為は続けられ、きつぱりと冬になるのである。その見事なまでのいきさよさで、自然の節理を無言のうちに説いてくれ

る。つなぎ止めるすべもなく立ち尽くす私はふと、人が生きるといいう意味も又、命をつなげる行為の一区間のランナーであることをさっとたのである。その思いは脚本の中で重藤にたくした。

書きながらも森に向って問いかける。苦しむ真夜中、星をふらせてくれた。自分に向ってくる星をうけとめ流れ星の歌とした。自然はさまざまにヒントを提示してくれる。まるで、神の啓示のように苦しみの果てには必ず光を与えてくれる。

小説は根も葉もある嘘を書くと言うが、私も又、現実と脚本の中を交錯した。万の葉の幾枚かは真実であり志斐には私の髪の一筋をもいとおしんだ母との断片を重ねた。

森に向い問い続け脚本の中の人々と共に過した二年間であった。

あの日旅立たせた小太郎はどんな顔をして私のところに帰ってくるのだろうか。私の存在を知るよしもない脚本の中の人々、上演に向って練習を見守る日々、親しく微笑みかけてくれる出演者の人達の狭間で、私は又、はげしく交錯するのである。

今地球上で起きていることを思うと、理想と現実の相違に空しくなる。一本の草々をいとおしむことがや

がては自然を守ることに、身近かな人を思いやるのが、人類の平和につながるが出来ないものかと。神の「みづち」はどんな答を出してくれるのだろうか。

森を歩くことで心の中を整理してゆく。生きていくのに捨て去るものは多いが少しばかりの誇りと品位とそして小さな正義をもち続けていたいと思う。

今日もずいぶん歩いた。歩き慣れた森の中とはいえ迷ってしまいそうな程深い霧であった。暖炉の残り火にたいた薪がようやくパチパチとはぜて、やがて一気に炎が立ちのぼる。冷えきった体を暖めながら、まるで「みづち」との逢瀬であったかのよう錯覚する。

霧に濡れることも雨に打たれることももう厭わなくなった。

天泣の雨が降ると「みづち」の流す涙かと思ひ、時雨が音を立て森の中を駆けぬけて行く時、「みづち」が訪ねてきたかと胸がさわぐ。姿も見せず表われる「みづち」。「みづち」との約束を胸に私も又遥かなる空を あおぎ、美しい地球の永遠を願う。

みづちは、私達に再び会うことなどないようにと言いのこして去ったが幾度も会いたいと思う



夕すげの咲く湖のほとり

つぶらなる

君待ちたまふ

眼裏のふるさと遠く

いくたびか心さまよふ

美しきふるさと

いつの日か

我帰らざらむ

美しきふるさと